

4 「生きる力」としての情報活用能力とコミュニケーション能力について

(1) 「生きる力」としての情報活用能力とは

生きる力は、情報活用能力と深いかわりがあることが分かりましたが、更に具体的な考察を行います。

ア 生きる力

前述の「生きる力」の定義を要約すると次の三点になります。

いかに社会が変化しようと、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力
自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性
たくましく生きるための健康や体力

このように、生きる力は、知・徳・体の調和の上に成り立つ総合力であり、全人的な力と言えます。更に第一次答申では、様々な観点から見た生きる力の要素を次のように示しています。

- 生きる力は、これからの変化の激しい社会において、いかなる場面でも他人と協調しつつ自律的に社会生活を送るために必要となる、人間としての実践的な力である。
- 生きる力は、単に過去の知識を記憶しているということではなく、初めて遭遇するような場面でも、自分で課題を見つけ、自ら考え、自ら問題を解決していく資質や能力である。
- 生きる力は、情報化の進展に伴ってますます必要になる。あふれる情報の中から、自分に本当に必要な情報を選択し、主体的に自らの考えを築き上げていく力などは重要な要素である。
- 生きる力は、理性的な判断力や合理的な精神だけでなく、美しいものや自然に感動する心といった柔らかな感性を含むものである。
- 生きる力は、よい行いに感銘し、間違っただけを憎むといった正義感や公正さを重んじる心、生命を大切に、人権を尊重する心などの基本的な倫理観や、他人を思いやる心や優しさ、相手の立場になって考えたり、共感することのできる温かい心、ボランティアなど社会貢献の精神も大切な柱である。
- 生きる力は、健康や体力が基盤となっている。

これらの資質や能力は、教育が目指す不易な要素と言えるものであり、内容として特に目新しいものではありません。これらの資質や能力をどのように育成していくのかを具体的に考え、系統だった育成の手だてを講じることが大切であると言えるでしょう。

当総合教育センターでは生きる力を「主体的に生きる力」「他者と共に生きる力」「生き抜く力」の三つの側面として考えています。¹⁾

¹⁾平成10年度 教育資料

「豊かな心を基盤とした生きる力をはぐくむ学校教育に関する研究(第1集)」

ここでいう「主体的に生きる力」と「他者と共に生きる力」は、中教審第一次答申の 及びの内容にほぼ対応します。しかし、先行き不透明で変化の激しい社会にあって、「主体的に生きる」、あるいは「他者と共に生きる」ためには「生き抜いていく力」が必要です。したがって、この二つの力を支える根底には、生きる力の三つ目の側面として、「生き抜く力」が必要であると考えます。この「生き抜く力」は、中教審第一次答申の の内容である「健康や体力」が中心ですが、ここではより広い概念としてとらえています。

生きる力を三つの側面から考えたとき、人間が「生きる」ということは、自分自身を大切に自己実現を目指すとともに、他者を尊重してお互いにかかわり合いながら、変化の激しい社会を生き抜いていくことであると言えるでしょう。

図2 - 1は、これらの三つの側面にかかわる資質・能力を示したものです。

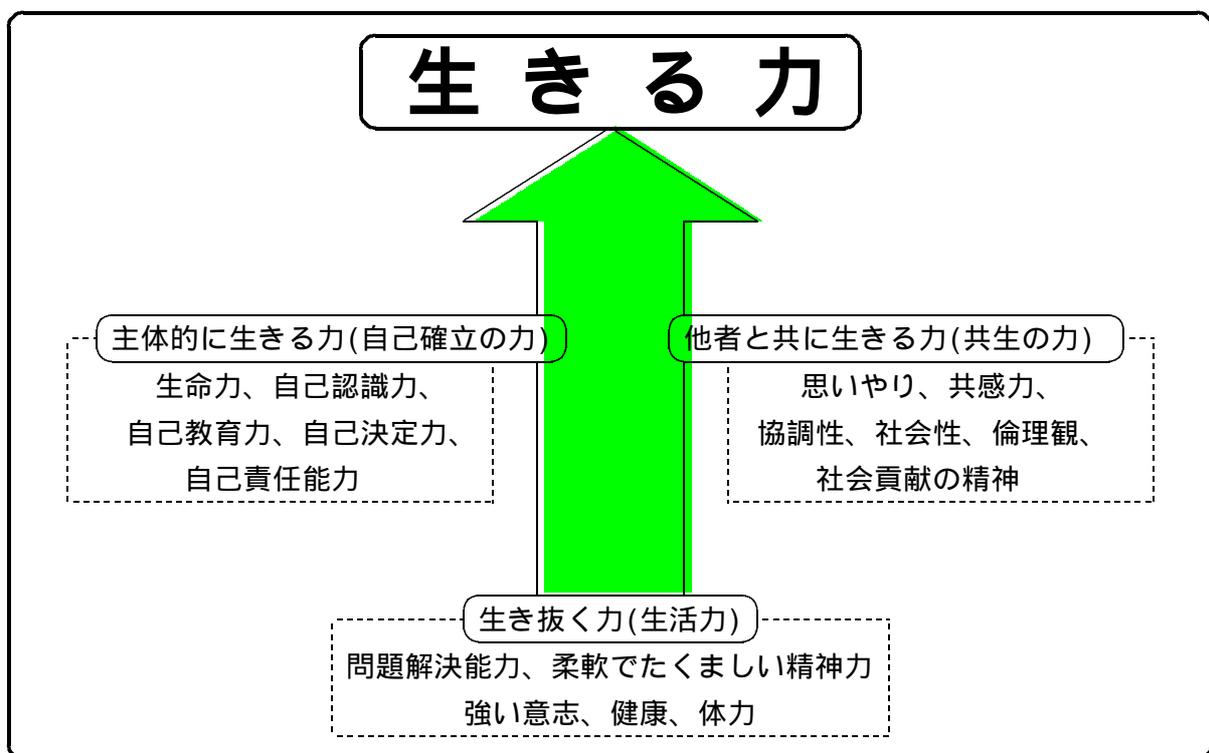


図2 - 1

人間が生きていくためには、一人一人が自己を確立しつつ他者と共に生きるために「生き抜く力」を備えることが不可欠です。そして、この力を育成するためには、状況を的確にとらえ、問題を発見し、問題を解決していく力がなくてはなりません。更には、こうした問題解決能力や柔軟でたくましい精神力を支えるものとして、心身ともに健康であることや体力が求められます。なかでも、主体的に問題を解決しようとする能力は、情報活用能力の育成を通して身に付ける部分が大きいと考えられます。

イ 「生きる力」と情報活用能力

この二つのかかわりについて、調査研究協力者会議第一次報告では、次のように述べています。

「生きる力」の柱の一つは、「自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」である。これは、言い換えると自己教育力や主体的問題解決能力と表現することができる。また「あふれる情報の中から、自分に本当に必要な情報を選択し、主体的に自らの考えを築き上げていく力」も「生きる力」の重要な要素とされている。これらの力は、情報教育の目標である「情報活用の実践力」として具体的に育成できると期待される。

子どもたちに自己教育力や問題解決能力を育成するには、これまでの受け身的な学習ではなく、自ら主体的に学ばせることが必要です。これからの社会においては、学校で習得した知識だけで社会の変化に主体的に対応することは難しく、その知識を基にしながら常に学習し続けることが必要になります。ゆえに、学校教育においては知識の習得だけでなく、子どもたちの興味や関心などを大切に、自ら学ぶ態度を身に付けさせることが重要になります。このような観点に立ち、子どもたちの発達段階に応じた指導を系統的、発展的に行うことにより、自己教育力や問題解決能力などの生きる力が育成されるものと考えます。

また、これからの社会を生きていく子どもたちには、あふれる情報の中から自分に本当に必要な情報を選択し、主体的に自らの考えを築き上げていく力が必要となります。これらの力の基盤として情報活用の実践力が必要だと考えられます。

以上のように、この調査研究協力者会議の第一次報告から情報活用の実践力の重要性が読み取れます。なお、調査研究協力者会議では、三つに分類した「情報活用能力」は独立のものとして扱うのではなく、相互に関連付けることが重要であると述べています。特に、情報化の光の部分だけでなく影の部分についても十分に留意しつつ、情報の科学的な理解によって実践力を定着・深化させ、情報活用能力の一層の向上を図ることが大切です。

各教科や領域の中で情報活用能力の育成をねらいとして指導する場合には、情報活用の実践力、情報の科学的な理解、情報社会に参画する態度という三つの能力を学習過程の中でどのように身に付けさせたいのか、目標を明確にして指導していくことが大切です。

更に、生きる力と情報活用能力とのかかわりについて、学習の場面に照らし合わせて考えてみると、情報活用能力を育成することは生きる力の構成要素となる力の育成と密接にかかわってくることに気付きます。これらの能力は、それぞれの学習場面において、必要であると同時にその学習を通して育成されていくものです。図2-2は、情報活用能力を基盤として生きる力が育成されるまでの関係を図示したものです。

このように、情報活用能力の育成について考えてみると、様々な場面で生きる力の構成要素となる力を育成していることが分かります。ゆえに、情報活用能力の育成は、生きる力の育成の中でも重要な位置を占めるものと考えます。

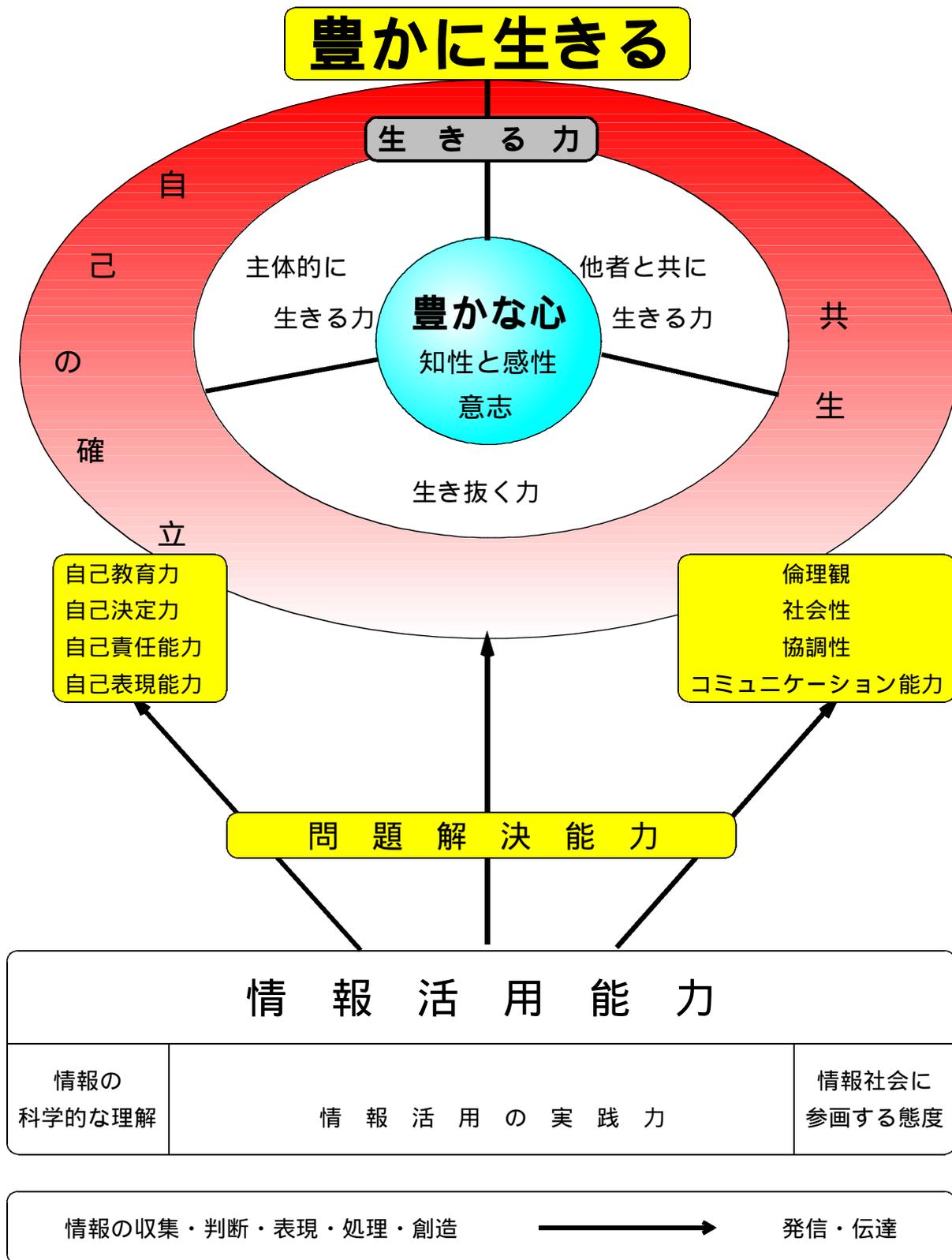


図 2 - 2 生きる力としての情報活用能力

(2) 情報活用能力におけるコミュニケーション能力とは

ア コミュニケーション能力

コミュニケーションとは、言語・文字その他五感に訴えるものを使って社会生活を営む人間の間に行われる知識・感情・思考の伝達、気持ちや意見などを言葉を通して相手に伝えること、通じ合うことなどと辞典には記されています。ゆえに、コミュニケーション能力というのは、自分の気持ちや意見などを相手に伝える能力であり、また、相手の気持ちや意見などを把握する能力であると考えられます。

これらの能力をはぐくむためには、鋭敏な知覚や論理的で多角的な思考力、言語・文字・その他各種媒体に関する理解や活用能力、心豊かで相手を思いやる感性などが必要です。これらすべての能力を「コミュニケーション能力」の範ちゅうとして考えていきます。

なお、調査研究協力者会議第一次報告では、「コミュニケーション」に関して次のように記されています。

「自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性」は、感性、人間性、社会性などの側面であり、家庭や学校などでの人と人との交わりや、自然や社会の現実に触れる体験を通して培われる。そのためには、コミュニケーションや表現活動が重要な役割を担うと考えることができる。

「コミュニケーション」や「表現活動」といえば、まず面と向かってお互いがかかわり合うような、直接的な人と人との交わりが連想されます。当然、直接的な人と人との交わりや実験を通して「感性、人間性、社会性」などが培われるわけですから、このような対面的なコミュニケーション能力の育成は重要です。

相手と顔を見合わせた対面コミュニケーションの場合、通常私たちは、主として言語コミュニケーションによる情報交換をしています。しかし、言葉だけではうまく表現できない場合には、身振り手振りや表情など、非言語コミュニケーションを組み合わせていることもあります。自分の伝えたい情報をうまく相手に伝えるには、その目的や内容を明確にして相手に分かりやすく表現すると同時に、相手の状況を踏まえて情報を発信することが大切です。そのためには、鋭敏な知覚や論理的で多角的な思考力、心豊かで相手を思いやる感性などが必要となります。一対一、あるいは、一対多の関係においてこのような音声言語を中心とした対面的なコミュニケーションが、学校や家庭などで人と人をつなぐ中心となるものであり、また、感性、社会性などの豊かな人間性を培う上で重要な役割を果たすと言えます。よって学校教育における国語科や外国語科などの言語を中心としたコミュニケーション能力の育成は、重要なものであると考えられます。

イ 情報化の進展とコミュニケーション能力

今日の社会では、道具を使ったコミュニケーションの場面が多くなり、以前とはコミュニケーションの形態が大きく変化してきました。携帯電話やファクシミリ、コンピュータなどの普及は、非対面なコミュニケーションを拡大し多様化しました。また、コンピュータや情報通信ネットワークなどの発達により、最近では、文字や画像、動画、音声などを組み合わせた多様な形態の情報が伝達可能になるとともに、個人が不特定多数の人に対して情報を発信できるように

なりました。

このような情報機器の普及で私たちの生活は、便利になる一方で新たな問題点も生み出されています。学校教育においては、それを踏まえたコミュニケーション能力の育成を進める必要があります。

例えば、子どもたちがホームページ等を利用して情報を発信し、その情報を特定の知人だけでなく多数の人に伝えることができるようになりました。そのため相手に分かりやすい内容にするとともに、自分の発信した情報に対する内容に責任を持たなければならないことを理解させる必要があります。このような情報社会に参画する態度を情報活用の実践力と一体化させて意図的、計画的に育成していくことが望まれます。

通常、私たちは直接対話で何かを依頼する場合、まず相手の状況を考えたり、反応を確かめたりしながらコミュニケーションを図りますが、電子メールの場合は、一方的な依頼をしがちとなります。それだけに、相手の状況を考えたり、反応を予想したりした相手の立場に立ったコミュニケーションを図る必要があります。

例えば、調べ学習などで誰かに尋ねたいことがある場合、電子メールで質問を依頼することができます。しかし、このような非対面コミュニケーションの場合は、相手の状況などを考えないままに実施すると望ましいコミュニケーションの成立は難しくなります。実際に、いくつかの学校のホームページでは、「本校のホームページを見て分かることは、質問しないでください。」「子どもたちの心を傷つけるような質問はご遠慮ください。」などの記述も見られます。

また、情報手段によるコミュニケーションにおいては、その情報の伝達に最適な方法を選択することが大切です。これからの社会では、情報手段をいかに活用し、自分の伝えたい情報をより分かりやすい形で表現するということがたいへん重要になります。そして、自分の伝えたい情報は、どのような形態や情報手段が適切か、それらの組み合わせは有効か、などの判断が必要になります。このような判断・選択には、それぞれの情報手段のもつ特性についての理解が必要です。そのために、学校教育においては発達段階に応じて、情報の科学的な理解に関する指導が必要であり、このような指導もコミュニケーション能力の育成につながるものと考えます。

今後、コミュニケーションのための情報手段がどのように進化しようとも、自分の伝えたい情報が相手にうまく伝わらない、あるいは誤った情報として受け取られてしまうということがあれば、それは、望ましいコミュニケーションが成立したことにはなりません。それだけに、学校教育においては、情報活用能力を基盤として、相手意識、目的意識を持ったコミュニケーション能力を育成することが今日的な課題です。